

山谷とその日雇労働者の表象分析
-1970年代テレビドキュメンタリーの形式的試みとの関係の中で
Analysis on the Representation of Sanya and its Daylaborers
-Focused on Audiovisual Characteristics of Japanese Television
Documentary in 1970s

◎李 旻胄
Minjoo Lee

東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
The University of Tokyo, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

要旨・本稿の目的は1970年代のテレビ・ドキュメンタリーにおける山谷とその日雇労働者の表象を分析するのである。特に、60年代後半から70年代にかけての社会的・メディア的变化によって可能になったと思われる形式的試み、主にインタビュー、現場音・画面を中心にする構成を分析する。そして、その構成的特徴および撮影技法によって構築される当時の山谷およびその日雇労働者の表象を検討する。

キーワード テレビドキュメンタリー、山谷、日雇労働者、インタビュー、現場音

1. はじめに—戦後の貧困と山谷の日雇労働者、そして70年代のテレビドキュメンタリー

1) 戦後日本の貧困と山谷の日雇労働者

1945年敗戦を迎えた日本は戦争で荒れ果てた廃墟の中国民全体が貧民化していた。スラム居住などと結びつけられたただ一部の貧民のみの社会問題として認識されてきた戦前の貧困・「貧民」認識が国家全体の目前の課題として再び浮かび上がった貧困の定常化(岩田 1995 : 306)状態であった。しかし55年を始発点にする高度経済成長は国民生活水準は回復され、いわゆる一億総中流社会の時代を迎えたのである。73年のオイルショックによる一時的経済不況やその後の沈滞があったものの、中流意識は社会認識のある種の主流として根付いてしまい、貧困というのはもうすでにその姿を消してしまったもの、あるいは、特定の集団・地域、例えば高齢者、障害者、児童、あるいは地方に限る周辺の問題として認識されるようになったのである。(吉田 1984) その社会周辺の一角で住み込み、「社会問題」として可視化される時以外にはその存在すら認識されていなかった貧困層・地域が日雇労働者や彼らが集まって暮らしていた山谷(東京)、釜ヶ崎(大阪)、寿(横浜)などの寄せ場であった。日雇労働者は日本の高度経済成長をもとになったともいえる建設・土木産業などにおいてその下請け制度の末端で「臨時工」、「社会工」などの非定期的形で雇用された労働者であり、元々大都市の一角で貧困層が居住してきた低下安易宿泊所(ドヤ)が集まっている寄せ場は彼らの生活や仕事の場であった。(加藤 1987; 西澤 1995) ここで、本稿が特に注目するのは73年のオイルショックによる不況の影響で雇用や生活において危機を迎え始めていた70年代の山谷とその日雇労働者である。

2) 70年代のテレビドキュメンタリー

丹羽(2001)によると、日本の最初のテレビ・ドキュメンタリーシリーズであるNHKの「日本の素顔」が「無私」で「公正中立」な立場を想定しながら、「異常民」に対する二重的感情、すなわち嫌悪と欲望を同時に投影しながら、「私たち=日本人(市民)」という自己認識を形成していく「ノンフィクション」であった。その自己認識が成立するプロセスの中主な役割を果たすのが映像に対してコメントをしその解釈を指示・限定する、すなわち製作者や見る側の立場を指名するナレーションであった。しかし、時代の変化はテレビドキュメンタリーにおいても様々な変化をもたらしたのである。それは60年代後半で放送された、東京の市民に対する突然のインタビューを中心にしたTBSの「あなたは。。。」および「日の丸」のような「物語らない」実験的ドキュメンタリー(丹羽、2002)、70年代の仕掛けやテレビの裏側を積極的に見せたり、完了した出来事ではなく現場

そのまま映し出しつづける「自己解体的」ドキュメンタリー(丹羽、2007)などの登場を含める。そして1972年2月、メディアイベントとしてのあさま山荘事件のテレビ中継による《現場>メディア受容空間》という経験濃度の不等式が崩壊してしまった(野上、2005)事件も60年代から70年代に渡って欠かせないメディア経験においての変化であった。このような変化を可能にしたのはまさに小型カメラと同時録音奇術の導入という技術的变化(桜井、2013)であり、より広く言えば、社会的出来事やメディアを含む時代的環境の変化によるものであった。

2. 研究の目的

本稿の目的は1970年代のテレビドキュメンタリーにおける山谷と山谷の日雇労働者の表象を分析するのである。特に、60年代後半から70年代にかけて新しく導入された技術である同時録音(桜井 2013)によって可能になったと思われる形式的試み、主にインタビューと現場音を中心にする構成、そしてその構成的特性とカメラ撮影技法によって構築される当時の山谷とその日雇労働者の表象を分析する。そのため、本稿で取り上げるのは1971年から1977年までNHKで放送されたテレビドキュメンタリーシリーズ「ドキュメンタリー」の中、「入院拒否の背景」(NHK、1975、8、1)「山谷のカルテ」(NHK、1977、1、22)である。まず貧困・寄せ場に関する先行研究、そしてテレビドキュメンタリーの研究の中での表象研究を踏まえて研究対象と研究方法を説明した上で、1)各作品が現場画面・現場音、インタビュー、ナレーションという構成要素をどのように組み立てているのかを分析する 2)山谷という空間が作品の中に登場する様々な下位、あるいは対立空間との間で生み出す意味合い関係を生と死、内と外という意味合いを中心に把握し、それが撮影技法により視覚化されるプロセスを分析する。 3)インタビュー画面に描かれた山谷の労働者の表象をカメラ撮影技法を通じて分析する。

3. 先行研究—貧困・寄せ場(都市下層)の言説・表象研究

貧困・寄せ場の研究がその活気を獲得し始めた80年代後半・90年代以前には、社会病理的アプローチである大藪寿一・大橋薫(1961)および労働経済学のアプローチである江口英一(1979)などの研究がその主な内容であった。しかし、90年代前半のバブル経済崩壊による経済不況、またそれによるホームレスの可視化や経済構造の変換などによって貧困・寄せ場研究はその量・質的成長が始まったのである。この時期の貧困・寄せ場研究は寄せ場・ホームレスに対する実証的研究に集約され、その主な傾向は1)特定の地域・集団としての生活世界、生活戦略や意味体系などを質的方法を通じて調査・分析する研究(西澤 1995など) 2)社会的差別・偏見の構造分析(青木 1989など) 3)政府政策・支援団体の視点からの支援策に関する研究(岩田 1995など)などに分かれるだろう。そしてその後の2000年代全般に渡って行われた新自由主義への社会・経済的変換に伴う雇用構造の変化や格差の拡大によるいわゆる「日本社会の寄せ場化」によって貧困・寄せ場研究はより広範囲な研究が蓄積されている。(青木、岩田など)

その中、貧困・寄せ場の表象・言説を分析する研究は数少ない。いずれも寄せ場内外のホームレスに関する言説を対象にしているものであり、その分析時期も90年代以降に限られている。これは前節で検討したように貧困・寄せ場問題が80年代後半・90年代に入って可視化され、その研究も同時期に活性化されたからだと思われる。主な研究としては中根(1995; 1996)、狩谷(1997; 1998; 1999; 2001)、そしてスェンソン・ヴィスゲイティス(2008)をあげられる。まず、中根(1995; 1996)は野宿者をめぐる2つの事件報道の中、野宿者が「不良者」というカテゴリーを経由して社会問題として構成されるプロセスを明らかにすることによって野宿者に対する言説が既存の社会的コンテクストとの関係の中で構成されということを明らかにしている。そして、狩谷(1997; 1998; 1999; 2006)は法廷・行政と支援団体の交渉の場で野宿者問題がカテゴリー化される・リアリティが確定されるプロセスを分析している。最後にスェンソン・ヴィスゲイティス(2008)は1991年、1996年、2001年、2006年の日本語版新聞と英語版新聞4紙を分析し、時間や言語の変数による報道の相違点を明らかにしたものである。

以上の貧困・寄せ場の言説に関する先行研究は90年代以降のホームレス問題にしている点、そして主に文字メディアや談話をその分析対象にしている点から本稿の目的とは少し離れているが、分析のカテゴリー設定、分析方法に関しては参照点を得ることができた。本稿においてはその参照点を踏まえて、先行研究では扱われていない映像的側面、そして70年代当時に時代的・メディア的变化による形式的特徴により焦点を当てて分析するのを試みる。

4. 研究対象・研究方法

本研究は2013年『NHKアーカイブス学術利用トライアル研究Ⅱ第2期』の『テレビが描いた貧困の表象とその意味構造 — NHK報道・ドキュメンタリー番組を中心に』研究の一部であり、番組観覧は主にNHKアーカイブスを利用して行われたのである。

研究対象はNHKアーカイブスの検索システムを用し、貧困、山谷、日雇労働、ドヤ、路上、貧民などのキーワード検索検索を行うと同時に、50年代から70年代に渡って主な社会派ドキュメンタリー系である「日本の素顔」、「現代の映像」、「ドキュメンタリー」（丹羽2011、20）の各放送分の簡略情報をNHKアーカイブスの検索システムで確認し抽出した。

その中、本稿が分析するのは70年代の貧困・寄せ場をテーマにするドキュメンタリー番組中2本、1975年放送された「山谷のカルテ」と1977年放送された「入院拒否の背景」である。各番組の特にこの2本に注目するのは貧困・寄せ場をテーマにする70年代のドキュメンタリーの中そのテーマを最も明らかに取り上げているとともに、前節の先行研究で得られた1970年代テレビドキュメンタリーの特徴を検討するに最適だと思われるからである。80年代から現在に至る他の番組に関しては他の紙面でまた検討することを試みたい。そして映像の分析は作品全体の構成、その構成に使われた重要要素である現場画面・音、インタビュー、ナレーションの役割、そして各シーンでのカメラ撮影技法を中心に行った。

5. 分析結果

1) 構成分析—現場音、ナレーション、インタビュー使用を中心に

山谷のカルテの形式的特徴はまさに中継の画面のようにある時空間の出来事を撮影した画面および同時録音された現場音そのまま使う手法である。それは作品の構成の軸が特定の空間になり、そこで起こった出来事を製作者の介入を最小化したまま撮影し、その画面や音声(現場音)を中心に作品を組み立ていくことである。この手法で撮影された画面はより高い事実性を確保すると共に、見る側は自分がカメラと同じ位置や目線で現場を見ているような錯覚を起こす。そのような効果には現場音を主にし、ナレーションの使用を最小化している手法とも深くかかわっている。本作品で使われているナレーションは特定の視点や意見を持つものではなく画面や現場音だけでは読み取れない山谷に関する背景知識を第三者である観察者の立場から提供することにとどまっている。ここでナレーションの内容は例えば山谷の変死者数の推移、無料診療所に入入りする人々の病歴などの説明、各空間に関する大略の説明などである。すなわち、現場をそのまま撮影・録音した画面・音声を見るだけでは読み取れない背景的情報を提供するしながらその画面・音声を最小限の連続性・物語性をもつものとしてつなげていく最小の介入が作品の中でのナレーションの役割である。実際に作品全体の中ナレーションが占める割合自体もすべての32つのシーンの中8つ、時間的には全体30分の中6分にしかならず、その使用や役割が最小化された形でナラティブを立て組んでいると確認できる。

「山谷のカルテ」の中、画面・現場音およびナレーション以外に重要なもう一つの構成要素はインタビューである。作品の中でインタビューが使われているシーンはナレーションとともにその数はそれほど多くはない。にもかかわらず、本稿でその数少ないインタビューに注目するのはインタビューのマイクが誰に向けられ、どのような話が語られるのかに注目する必要があるからである。まず、インタビューの対象は無料診療所で働く医者たちではなく山谷の労働者に限られているのであり、質問をする製作者の姿や声は聞こえるもののその役割はそれほど大きくはなく、主には山谷の労働者の話が自由に続けられるものである。その話を引き出す製作者の質問は“いま、体はどうですか?” “いま、何をしてもらいたいですか?” “何日くらい仕事していないですか?” などの事実を聞く簡単な質問に過ぎない。しかしこのような簡単な質問に対し、彼らの生活の苦しさ、酒に頼らざるを得ない自分らの弱さ、そして抱えている病気や死に対する怖さなどの答えが延々と続けられるように返ってくる。これは答えをする対象が大部分酒によつばらって管を巻いている状態で訳のわからないことをマイクに向けてしゃべり続けている場面をそのまま撮影してからである。作品の中で現場音が主に医者とのやり取りの中で現れる彼らの姿を見せている一方、インタビューは彼らの声、意見などを見る側に伝える重要な役割を果たすのである。しかし、ここで彼らの声は意見、あるいは話ではなく‘叫び’に近いものと聞こえてしまうのである。

「入院拒否の背景」は山谷のある駐車場で発見された病者が54か所の病院からすべて入院を断られ何時間も救急車の中に放置されていた事件を追跡しながらその背景の事情を探るのを試みている。そのため、最も主な構成要素として使われているのがインタビューである。全体の事件の経緯を時間の流れを軸にしたうえで、関連した人々の口を借りて事件を再構成していくのである。そのインタビューの対象は主に事件にかかわった病院関係者、主に医者や看護師、そして救急センターの職人などである。そして彼らがマイクに向けて語るのは当時の状況、入院を拒否した理由、そして事件が起こった社会的背景などに関する自分なりの見解である。ここで彼らが述べる当時の状況や彼らの立場からの弁護、そして山谷に対する社会一般の態度に関する見解などは当時の事件を再構成していく過程において重要な証言・情報として扱われ、彼らはある出来事に関して自分なりの意見を披露できる人々として映し出される。彼らのインタビューは「山谷のカルテ」での山谷労働者に対するインタビューや本作品の最後に一回のみ登場する山谷の労働者(入院している病者)のインタビューとはその内容も割合も最も対照的

なものである。同時に、当時の状況を再現するにあたってもう一つ重要な構成要素は当時の救急センターの録音音源、すなわち救急隊員と救急センターの職員とのやり取りが録音された音声なのである。この録音音声は当時の緊迫感や生々しい臨場感をそのまま伝えるものとして、事実性を高める証拠として、山谷のカルテでの現場音やその画面と同じ役割を果たすと言えるだろう。この録音音声が生かされる時の画面はおそらく後で撮影されたはずの救急センターのコールセンター内部の風景、職員たちが座りっぱなしでタバコを摺ったり座り方を変えたりしながらかかってくる電話に対応し続ける風景である。この画面は当時のものではないが、当時の救急センターのコールセンター内部の状況を推測させる映像的説明である。

最後に、「入院拒否の背景」のナレーションは事件の背景を追いながら作品全体の論理を展開していく語り手としての役割を果たす。しかし、ここでは作品全体を支配する「神の視点」としてのナレーションだというより事件の外部的な情報・背景を提供したり、再構成されていく事件の当時の状況や展開を説明すると同時に、隠れた背景、原因などを診断し作品全体の論理構造を築いていく、第三者の観察者、あるいは事件の経緯を探る記者のような立場である。作品の中で使用される割合もナレーション中心のドキュメンタリーに比べてその頻度が少ない方であり、作品の主な部分を占めるのは明らかにインタビューである。

以上で検討した2本の作品において構成要素としての現場音、ナレーション、そしてインタビューによる構成は本稿の最初で検討したように本稿の構成的特徴は60年代から70年代に渡るテレビドキュメンタリーの発展や70年代の社会・メディア的变化との関係の中で生まれたものと言えるだろう。まず60年代の「日本の素顔」と体表される「公正中立」の立場に立つナレーションを中心とする物語性の強いテレビドキュメンタリーに比べ、本稿で検討した2本の作品では現場をそのまま撮影した画面や現場音、そしてインタビューを主な構成要素として使用しながら、ナレーションの介入を最初化したり、インタビューシーンなどの画面や音声を通じて質問する製作者の存在を常に呼び起こしている。その中、製作者の位置は以前と違って見えない「神の視点」ではなくある意味では意識的に自分の存在を作品の中に現せる観察者、あるいは真実を探りながら苦悶する質問者・案内者として位置づけられるのは確かである。しかし、相変わらずナレーションに頼ってある程度の物語性は維持している点、そしてナレーションを通じて直接に語ってはいないものの、カメラの撮影技法によって視覚化された画面にはその観察・案内・質問者の意図や対象に対する距離感が現れてしまう点についてはその意味をより深く検討しないといけないのである。それは次の山谷と日雇労働者に対する表象を映像画面を通じて検討することによって考えてみたい。

2) 山谷という空間一生と死、内と外をめぐる空間の意味合い

本稿で注目するもう一つの要素は作品において各空間の意味およびそれらの意味関係である。まず、前節で検討したように、山谷のカルテではその構成がある空間での出来事をそのまま撮影した画面・現場音を中心になっているため、空間は全体の語りを導いていく軸としての役割を果たしている。山谷のカルテに登場する空間はイントロ部分の棺が置いてある浅草署の地下、山谷福祉センターの無料診療所の室内、山谷の町、追悼式が行われる家内の4つの空間である。カメラはこの4つの空間を棺が置いてある浅草署の地下をイントロとして始め、山谷福祉センターの無料診療所の室内→山谷の町→追悼式が行われる家内→山谷福祉センターの無料診療所の室内→山谷の町、そしてアウトローとして再び山谷福祉センターの無料診療所の室内に戻ってその物語を終わらせるのである。空間別の時間割は以下のとおりである。この4つの空間は山谷労働者の死と生をめぐる意味空間でもある。棺が置いてある浅草署の地下および追悼式が行われる家内は明白に死の空間である。特に追悼式が行われる家内は山谷労働者が自分らの周りに散在している死のことを対面し、それに対する恐怖感を共有したりお互いの安否を確認する、死を媒介にしある種の共同意識を感じる空間である。それに対し、山谷の町は彼らの生が日々生々しく継続する空間である。映像から現れているように山谷の町、路上は仕事にあぶれた日にはドヤの代わりに体を横たえないといけない空間であり、仕事のやり取り、他の労働者との時間つぶしをするまさに生活の場そのものである。そして福祉センターの無料診療所は彼らの生と死が共存し、交渉される中間的空間として思われる。そこで山谷の労働者は医者に自分の病気や酒に対する弱さ、生活の苦しさなどを打ち上げながら生(生活)と死(病)に対する恐怖感を緩めたり、実際の治療を受けて病気や死から救われたりすることによって生と死を交渉しつづける。

「入院拒否の背景」では「山谷のカルテ」と同じく山谷の町、山谷福祉センターの無料診療所の2カ所と、山谷の病者を受け入れなかった数カ所の病院、そして救急センターのコールセンターの2カ所が登場する。そしてここでは「山谷のカルテ」で検討した生と死の意味合いに加えて、内と外、すなわち山谷と外部の社会という意味合いが各空間にあらためてつけられる。まず、生と死の観点から見ると、生の山谷の町があり、それと対峙し、拒否という行為を通じて一方的に山谷の労働者の死を決定する(あるいは死をそのまま放置する)外部空間として山谷の病者を受け入れなかった数カ所の病院が新しく登場する。

そしてこの二空間を媒介するのが福祉センターの無料診療所と救急センターのコールセンターであり、山谷の人の死を交渉する中間空間として存在する。ここにはさらに隔離された内部としての山谷の町と彼らの対する差別・あるいは社会的認識を代弁する山谷の病者を受け入れなかった数か所の病院が形成する内と外という対立関係が付け加えられる。そしてその意味合いは各空間を映し出すカメラの眼差しからより明確に視覚化される。例えば、山谷の町を映し出す各作品の手法は驚くほど共通し、それは製作者がカメラを持っているまま山谷の道路を歩きながら撮影したような画面であり、道路を通りながら至る所々に酔っぱらって座ったり寝ている山谷の人々を盗み見るようなものである。これは山谷の町の生活をそのまま映し出すものだというものの、ハンドヘルドという撮影技法によってより不安定で無秩序な印象を与える。その一方、山谷の病者を受け入れなかった数か所の病院の場合はその中で行われる医者および看護師のインタビュー画面が主である。そしてその空間というのは既に後ろに本棚とかきれいな壁を背景にし、固定されたカメラによって自分の見解を述べる医者・看護師が安定的な上半身カットで映し出される。このように、各空間の持つ意味合いはカメラの撮影技法・眼差しによって視覚的にも構成されているのである。

3) 山谷労働者の身体性と心理的距離感 —カメラ撮影技法を中心に

ここでは2本の作品で山谷労働者の表象を彼らを直接に映している現場・インタビュー画面を中心にカメラの撮影技法・眼差しを通して検討する。「山谷のカルテ」の場合、福祉センターの無料診療所で診察を受ける山谷の労働者はある程度の遠距離で医者と一緒にバスト・ウェイト・フルショットで撮影された画面と、診察や治療を受けている時、傷ついた特定の身体部位を極端的なクローズアップで見せている画面が主に使われている。そしてインタビュー画面においてはそのほとんどが一般的インタビューショットと思われるバストショットで始まるが、その後同じく特定の身体部分、例えば、震えている手や足、あるいは顔のある部分を、また極端的なクローズアップで見せたり、急にカメラがズームアウトし、フルショットで座っていたり酔っぱらって倒れてしまう彼らの姿を映すカットで終わる場合が多い。このような撮影技法は「入院拒否の背景」最後の山谷労働者に対する長いインタビューシーンでも同じく使われている。病院の病室で行われたこのインタビューシーンはベットの座って製作者と話す山谷の労働者をフルショットから始め、彼の上、後ろの姿や、手と足のクローズアップ、そして壁に映った影などを順に映し出しながらつづく。

このような身体特定の部分に対する極端的なクローズアップは山谷労働者の身体性を強調し、彼らを身体的な部分的な存在としてイメージ化する効果をもたらす。特にその身体部分が酒に酔っている状況であることを現す震える手足であったり、体を使って食べていく人間の荒さを現すような形が変わった指先であったり、あるいはインタビュー中に震え続けるタバコを持つ手であったりする場合には不安定で恣意的だと思われる彼らの生活習慣が強調され、また彼らに対する不定的なイメージを強めてしまうのである。それと同時に、急なズームアウトは、彼らが山谷の路上で不安定的に座ったり、酔っぱらって体を支えられず横に倒れてしまう様子をフルショットで撮影することによって瞬間的に彼らから距離を置く、心情的距離感を現す。結局、彼らを最も主に撮影する画面であるインタビューシーンでさえ、山谷の労働者は近すぎるクローズアップで身体や存在を分節化されたり、あるいは急なズームアウトによるフルショットで心情的距離感を縮めにくい遠い存在としてしか存在できないのである。そしてその中、一貫的に浮き彫りにされる山谷労働者の身体は「労働する体」ではなく、荒い生活や酒によってすり減った「病理的体」である。

6. まとめ

本稿では1971年から1977年までNHKで放送されたテレビドキュメンタリーシリーズ「ドキュメンタリー」の中、「入院拒否の背景」(NHK、1975、8、1)「山谷のカルテ」(NHK、1977、1、22)、2本の構成や山谷・日雇労働者の表象を分析した。それぞれの作品はナレーションの使用をおさめ、現場をそのまま撮影した画面・現場音やインタビュー画面・音声を中心にその構成を組み立てていた。そのような構成は「神の視点」のナレーションに頼る物語性の強い既存のテレビドキュメンタリーとは相違点を示し、作品の中常にその存在を現し、観察・質問・案内する者としての製作者の立場が見られた。しかし、山谷という空間、特に山谷の町は生と死、内と外という意味合いの中他の空間との関係性を持つが、ハンドヘルドなどのカメラ撮影技法によって不安定で無秩序な空間として描かれた。そして、山谷の日雇労働者の場合には特定の身体部分の極端的なクローズアップ、急なズームアウトなどによって「労働する体」は削除され「病理的体」のみが彫りにされた存在、そして心情的距離感は縮まれない遠い存在として描かれている。

参考文献

- 1) 青木秀男, (1989):『寄せ場労働者の生と死』, 明石書店.
- 2) _____ 編, (2006):『日本の貧困研究』, 東京大学出版会
- 3) _____ 編, (2010):『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』, ミネルヴァ書房
- 4) 岩田正美, (1995):『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』, ミネルヴァ書房.
- 5) _____, (2007):『現代の貧困—ワーキングプア/ホームレス/生活保護』, 筑摩書房
- 6) 江口英一, (1979):『現代の「低所得層」』, 上 未来社.
- 7) 大橋薫 (1961):『都市の下層社会』, 誠信書房.
- 8) 加藤佑治, (1987):『現代日本における不安定就業労働者 増補改訂版』, お茶の水書房.
- 9) 狩谷あゆみ, (1997):「社会問題の構成と隠蔽 『道頓堀野宿者殺人事件』に関するマスコミ報道を事例として」, 『ソシオロジ』, 42-1 (129) : 77-95.
- 10) _____, (1998):「法廷における犯行動機構成と被害者のカテゴリー化 『道頓堀野宿者殺人事件』を事例として」, 『社会学評論』, 49-1 (193) : 97-109.
- 11) _____, (1999):「保護/撤去/襲撃 震災後・神戸の野宿者問題」青木秀男編著『場所をあける! 寄せ場/ホームレスの社会学』松頼社: 129-61.
- 12) _____, (2006):「加害者と被害者を引き離す 野宿者襲撃をめぐる言説」, 狩谷あゆみ編 『不埒な希望 ホームレス/寄せ場をめぐる社会学』, 松籟社, pp. 279-306.
- 13) 桜井均, (2013):「テレビ 60 年の考古学—1970 年代ドキュメンタリーに何が起きていたか」, 『放送研究と調査』, 放送文化研究所, 2013(6) : 68-85.
- 14) 中根光敏, (1993):「〈FURUSHA〉 = 排除のカテゴリー化作用 - 新宿西口バス放火事件と横浜「野宿者」殺傷事件に関するマスコミ報道を事例として」, 『「寄せ場」をめぐる差別の構造』, 広島修道大学総合研究所, pp. 53-78
- 15) _____, (1995):「『寄せ場』差別の現象学—排除のカテゴリー化作用と市民社会のロジック」, 好井裕明編 『エスノメソドロジーの現実—せめぎあう〈生〉と〈常〉』, 世界思想社, pp. 167-185
- 16) 西澤晃彦, (1995):『隠蔽された外部:都市下層のエスノグラフィー』, 彩流社
- 17) 丹羽 美之, (2001):「テレビドキュメンタリーの成立—NHK ドキュメンタリー日本の素顔」, 『マス・コミュニケーション研究』, 59 : 164-1.
- 18) _____, (2002):「1980 年代の実験的ドキュメンタリー物語らないテレビの衝撃」, 伊藤 守編 『メディア文化の権力作用』, せりか書房, pp. 75-97
- 19) _____, (2007):「ドキュメンタリー—青春時代の終焉—70年代テレビ論」, 長谷正人編 『テレビだよ! 全員集合—自作自演の1970年代』, 青弓社, pp. 80-103.
- 20) 野上元 (2005):「あさま山荘事件と「戦争」の変容—「メディア論」の現代史のために」, 北田 暁大, 水溜 真由美, 野上 元編 『カルチュラル・ポリティクス 1960/70』, せりか書房, pp. 92-113.
- 21) 橋本 俊詔編, (2006):『日本の貧困研究』, 東京大学出版会
- 22) Swenson, Tamara and Visgatis, Brad (2008):「日本新聞のホームレスについてのニュース報道における構造の変化」, 『大阪女学院大学紀要』, (5) : 19-44